

国語

(国語総合)

令和二年度福岡県農業大学校入学試験問題

* 解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

控え目な感情は①凡庸な人間をつくり、ひとは小心翼翼々としていると創造的でありえなくなる。これは行きすぎた②ヨクセイや禁欲的態度がおちいりやすい陥穽かんせいを示している重要な③シテキである。いうまでもなくそれは、詩・絵画・音楽といった④セマイ意味での芸術に関わるだけではなく、もっと広い人間の知的活動や「a」的活動にも関わっている。だから、たとえどんな小さなことにせよ、日に日に発見や創造の喜びをもつて生きていくためには、通常考えられているより以上に、A知的情熱としての好奇心をいきいきと保っておかなければならないのである。

ところで、知的情熱としての好奇心とは、私たちが世界や自然やものごとに向ける強い関心のことである。そして、知識よりも何よりも関心(インタレスト)こそがあらゆる文化や学問の原動力である、と見えそうだが、関心こそが知を⑤拓くのである。例えば、次のような事実がある。すなわち、私たち人間の文化の⑥コンカンを形作っているのは言語や⑦ガイネンの体系であろうが、それらの体系の精密度は文化によって違う。といってもその違いは、その文化や社会に属する人々の知的能力の差によるのではなく、細部のものごとにもまでどれだけ関心を示すかという、関心の強さの差によるのである。この重要な事実を「b」的なかたちで女性の人類学者スミス・バウエンが体験談として示してくれたのである。

彼女はアフリカの或る部族の調査に行ったとき、まず最初に彼らのことばを覚えようとした。その際、現地人たちは、初歩の段階で植物の見本をたくさん集めてきて、それらを示しながら一つ一つの名前を言うというかたちで、彼女にことばを教えてくれた。それは彼らにとつては、ごく当たり前のやり方だった。ところが彼女には、Bそれらの植物が識別できなかった。なぜか。それらの植物が見慣れないものだったからではなくて、彼女がそれまで、植物界の豊かさや多様性そのものにほとんど関心がなかったからである。それに反して現地人たちの方は、そのような興味は誰でも当然もっているものだと思っていたのである。スミス・バウエン自身のことばで言えば「彼らにとつて植物は人間と同じように重要で、また同じように親しいものでした。ところが私の方は農家の生活をした経験がなく、ベゴニアとダリアとペチュニアとを見分けることにも自信がなかったのです」「私が入り込んだ社会は、野生植物であろうと⑧サイバイ植物であろうと、植物にはすべてはつきりきまった名前と⑨ヨウトがあつて、男も女も子供も、誰でも何百種類という植物を知っているような世界でした。彼らほどに植物を知ろうとしたところで、到底私には不可能でしょう。その上、たとえ私がそれを言っても彼らはそれが本当だと、誰一人信じてはくれないでしょう」。

こうしてそこから、次のことが明らかになる。ものの分類、識別、⑩命名を私たちに可能にするのは、何よりもそれに対する関心であり、興味である。従つて、関心や興味がまるでない場合には、いくら自分では「c」的に知りたいたいと思つても、それを知るようにはならない。こういう次第で、もし私たちがC知的活動を活発に行おうとすれば、まず第一に、関心や興味を強く持ち続けることが必要だ。さらにいえば、関心や興味を育てることが必要である。つまり、自分が面白いと思うことを探し出し、遠慮せずそれに眼を向けるようにすることである。D自分で面白くなくなったこと、面白くと思えなくなったことをいくら後生大事に抱えていても、そこからは何も生まれてこないのである。

出典 中村雄二郎「知の旅への誘い」より

(注) 陥穽 落とし穴。わな。

問一 傍線部①～⑩の片仮名を漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えよ。

問二 二重傍線部A「知的情熱としての好奇心」を筆者はどのようなものと考えているか、具体的内容を

述べている部分を本文より二十五字で見つけ出し、その最初と最後の五字を抜き出して答えよ。

(句読点は字数に含まない)

問三 本文の空欄「 a 」「 c 」に入れるのに最も適当なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 説得 イ 否定 ウ 意識 エ 精神 オ 視覚

問四 二重傍線部 B 「それらの植物が識別できなかった」理由は何か、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 彼女は農家の生活をした経験がなく、それらの植物が見慣れないものだったから。

イ 彼女は現地の人たちが植物の見本をたくさん集めてきたので、興味を強く持ちすぎたから。

ウ 彼女が知っている植物と彼らの野生植物や観葉植物は形状が異なり識別できなかったから。

エ 彼女はこれまでの生活で、植物界の豊かさや多様性そのものにはほとんど関心がなかったから。

問五 二重傍線部 C 「知的活動を活発に行おう」とするならばどのようなことが必要だといっているか、次の説明文の空欄に入れるのに最も適当な語句を本文より五字で抜き出して答えよ。

【説明文】 「」を強く持ち続け、さらにそれらを育てることが必要である。

問六 二重傍線部 D と同じような趣旨を表す一文がある。その一文を本文の第一段落の中から見つけ出し、最初の七字を答えよ。(句読点は字数に含まない)

問七 本文の内容に合致するものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えよ。

ア 控え目な感情は、創造的な詩・絵画・音楽といった芸術活動には大切なことである。

イ 文化的な知識よりも関心こそが、あらゆる文化や学問の原動力である。

ウ 言語等の体系の精密度は、文化や社会に属する人々の知的能力の差である。

エ ものの分類、識別、命名を可能にするのは、興味や関心よりも知識である。

オ 知的活動のためには自分が面白いと思うことを探し出し、それに眼を向けることである。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

目を閉じると、立ち枯れたままの草に①オオわれた大地が広がる。前にも後ろにも、家も生き物も見えない。あるのは一本道だけ。はるか彼方に風が起こり、とぐろを巻きながらどんどん近づいてくる。たちまち砂埃で視界が赤茶色に染まる。とにかく前へ。行けども行けども、景色は全く変わらない。「日没前に着くように」と案内人の友人からさんざん念を押されて、私は待ち合わせ場所へと車を飛ばしていた。

I

当時私はマスコミの仕事を離れて、農業や漁業、②ボクチクに携わっていた。イタリア半島の生産者や漁場を訪ね、各地の土壌や土地に伝わる農業や漁業に関する報告書をまとめていた。それは、イタリアの大地と海と胃袋を知ることだった。時間との競争だったそれまでの生活は殺伐とし、(a) だったが、切羽詰まった状況から解かれ、豊潤なイタリアの③懐に抱かれて過ごすことになった。短期間のつもりが、気付くと十数年も経っていた。

「古代ローマ時代からずっと蜂蜜を作っている人達が島にいる。会いに行ってみないか」

マリオから、新しい訪問先への誘いがあった。私をイタリアの農、漁業に招いてくれた恩人だ。私がサルデーニヤ島のひなびた港に古船を碇泊させ、船上生活をしていたときに知り合った。マリオの家は代々、島で生まれて暮らしてきた。故郷の美しい環境を守るために、若い頃から農業に従事してきた。土に触れ水を引き、風に訊いて天を観る。農作物を育てることは、島を成すすべてを知ることだからだ。

II

「その養蜂家の家財道具は、蜂箱くらいでね」

古代ローマ時代から蜂蜜作りを④世襲し続け、現在も蜂を追いかけて暮らしているという。

サルデーニヤ島の都のカリアリ市から、待ち合わせの内陸へ車で向かった。主な町と町との間には高速道路が通っているものの、いったん下りると、大地いっぱい左に右に大きく振られて蛇行を繰り返す道とな

る。道のりは、海を風を拾いながら進む帆船の航路とそっくりだ。U字を繰り返すうちに⑤丘陵地帯を越え、両側に険しい山が迫ったかと思うと深い谷間へと入り、長い時間をかけて少しずつ前へ進んで行く。稀に道が交差するところには、地名を書いたいくつもの標識が（b）ように突き出している。周辺には、道を尋ねる家も店も、ガソリンスタンドすらなかった。おまけに道には外灯がない。日が暮れると、頼りになるのは自分の車のヘッドライトだけになる。

町を出るときに満タンにしてきた。道に迷って引き返すことになっても、どの地点まで戻ればいいのか見当も付かないだろう。ひとたび曲がり損なうと、道程を修正するのに数十キロ分、余計な燃料を食うに違いない。マリオは道順を教えるとき、「フロントガラスの中に見える太陽の位置を基準点にするように」と、言った。走行地点や方角が正しいかどうかを確認するために、目印になるユーカリの原木や赤い岩を挙げた。しかし、どれも日が沈んでしまえば無用の道標だ。いっそ夜の航海のように、Xを見ながら進む⑥カクゴをしたほうがよいのかもしれない。

「ここだろうか。いや、もう一本先かもしれない」

地平線がオレンジ色に染まり始めてきた。Aいったん車を停めて、気を鎮めよう。

III

ドアを開けると、足元から（c）のような匂いが押し寄せた。花も実もない、膝の高さほどの草が茫茫と生えているだけだ。一步二歩と踏み付けるそばから、さらに青々とした匂いが勢いよく立ち上る。草に囲まれ伸びをする空気がそよぎ、大気中には⑦タダヨウ土や湿り気の匂いがした。深呼吸すると、鼻腔を突き抜け胸の奥深くまで島の匂いで満ちた。

B窓を開けたまま発車する。ゆっくり走るのは、草の匂いから逸れないためだ。

「一族の家は、タイムの密生している丘を上りきったところだから」

マリオが道順の説明に付け加えていたのを思い出したからだだった。草の匂いには、確かに覚えがあった。吸い込むとすぐ、島料理の味わいが舌先によみがえった。

「あれだ！」

以前に呼ばれた島の祝宴で、牧童が⑧ツミたてのタイムやミルト、ローズマリーなどの香草を束にして持ち、ジュウジュウと滴り落ちる脂を香草で掬い上げては肉に塗り込めていたのを思い出した。

IV

タイムに導かれて、日の沈む直前に到着した。挨拶しようと家主へ手を差し出すと、

C「丘の裾で車を降りたでしょう？」

私に向かって大げさに鼻をひくつかせ、穏やかに笑った。わずか数分の休憩だったが、タイムで焚き染めたように全身が匂い充ちたらしい。

ブーンと小さな⑨羽音がし、私の頭上を蜂が⑩旋回している。

出典 内田洋子「サルデーニヤの蜜蜂」より

問一 傍線部①～⑩の片仮名を漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えよ。

問二 空欄（a）（c）に入れるのに最も適当な語を次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア むせ返る イ 雲が沸き立つ ウ 千手観音の

エ 砂を噛む オ 夢を見ている カ タコの足の

問三 本文の空欄 X に入れるのに最も適当な一語を考えて答えよ。

問四 二重傍線部 A 「いったん車を停めて、気を鎮めよう。」この時の気持ちを最もよく表しているものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 道程が正しいのか不安になり、その上、日没が近づきつつあることで焦る心を整えたかった。

イ 随分遠くまで車を走らせたので休憩を取りたくなり、いい報告書が書けると興奮していた。

ウ 島の内陸は今まで観たことのない景色で、あまりの美しさに高揚した気持ちを抑えたかった。

エ 周囲はタイムが茫茫と生え、深呼吸をすることで島の祝宴の香草を思い出した懐かしかった。

オ 養蜂家の家が近いことで、どのような人達だろうかとはやる気持ちを落ち着かせたかった。

問五 二重傍線部B「窓を開けたまま発車する。」とあるが、何のために窓を開けているのか、それがわかる箇所を本文から見つけ出し、十二字で抜き出して答えよ。(句読点は字数に含まない)

問六 次の一文は本文のどこに入るか、最も適当な箇所をI、IVの中から一つ選び、記号で答えよ。

不思議な旅だった。あれから、どのくらい経っただろう。

問七 二重傍線部C「丘の裾で車を降りたでしょう？」とあるが、なぜわかったのか、その理由が最も適切に書かれている箇所を本文より二十五字で見つけ出し、最初の十二字を抜き出して答えよ。(句読点は字数に含まない)

問八 本文で述べられている「私」の説明として合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア マスコミの仕事で養蜂家の家を訪ねることになった私は、友人の車で現地向かった。
- イ 殺伐とした生活を送っていた私は、養蜂家の家で過ごすことで豊潤なイタリアを体験した。
- ウ 私は養蜂家を訪ねるために険しい山や深い谷間を通ったが、一本道の快適な旅であった。
- エ 荒涼とした大地に日暮れが迫る中、私はタイムの草の匂いを頼りに養蜂家の家に着いた。
- オ 私は途中道に迷いやつとの思いで養蜂家の家に到着すると、皆が島料理で歓迎してくれた。

第三問 次の各問に答えよ。

問一 次の文学作品の作者名を後の語群から選んで、記号で答えよ。

- ① 武蔵野 ② 檸檬 ③ 蟹工船 ④ 雪国

【語群】 ア 小林多喜二 イ 川端康成 ウ 森鷗外 エ 国木田独歩 オ 梶井基次郎

問二 次の四字熟語の空欄⑤、⑩に入れる漢字一字をそれぞれ答えよ。

- (⑤) 立無 (⑥) ……ただ一人で助けのないこと。 【コリツムエン】
- 傍 (⑦) (⑧) 人 ……人前でも勝手きままにふるまうこと。 【ボウジャクブジン】
- (⑨) 心暗 (⑩) ……何でもないことまで恐ろしく感じられる。 【ギシンアンキ】

第四問 次の文中の傍線部のカタカナを、それぞれの文意にふさわしい漢字に改めよ。

